

イスラエル側の産業・経済被害は甚大

ラリー・ジョンソン

YOUTUBE グレン・ディーセン 2025 年 07 月 11 日

<https://www.youtube.com/watch?v=GUjckivz8S4>

グレン・ディーセン

皆さん、こんにちは。今日もまた、元 CIA の情報分析官で、米 국무省の元顧問でもあるラリー・ジョンソンさんにお越しいただきました。

あなたの記事を読んだからです。イスラエルとイランがお互いを攻撃し始めたとき、私たちは多くのことを学んだからだ。実際に起こった損害を評価するのは非常に興味深い。多くの人が驚きました。イランの兵器の質だけでなく、イラン人の能力についても。多くの人はイスラエルの防空能力の方がはるかに強いと考えていが、イラン人の能力は非常に高かった。もう一つ注目したのはイランの攻撃目標の選定の仕方です。この点についてあなたは的確な評価を与えている。

ラリー・ジョンソン

バーの喧嘩を見たことがあるかどうか知らないが。二人の男がお互いに腹を立てて、拳を振り上げて、あらゆるものを殴り始める。彼らは特定の何かを殴ろうとしているわけではない。イランはそういうことはしなかった。

***イランがやったのは港の封鎖だった。イスラエルには、40 フィートコンテナ船が入れる港が 2 つしかない。彼らはまずそれに成功した。**

***次に 2 つの石油精製所を破壊した。イスラエルには 2 つの石油精製所しかない。**

***それから国際空港を閉鎖させた。**

***そしてワイズマン研究所を攻撃した。ワイズマン研究所は核のための大きな研究センターだが、それだけではない。彼らの新しい核兵器計画やその他の軍事計画、それから、インテル、RAON、イスラエルの武器産業—たしか IAI だ—と思う—に被害を与えた。そして**
***もちろん軍事基地にも攻撃を加えた。**

これらの攻撃を隠蔽しようとして、イスラエルは大規模な検閲を行った。そのためメディアが入手した唯一のビデオ映像は、ハイファやベルサ（Beersa）の住民のものだった。

ここでベルサについて一言言っておきたい。そこには隣接して多くの研究施設があった。特筆すべきは、民間人の死傷者がそれほど多くなかったことだ。殺されたイスラエルの民間人の総数は 29 人だったと思う。あちこちでミサイルが炸裂していたのに、その数がそう多くなかったのは驚くべきことだ。それはどういうことか、つまりイランがイスラエルの民間人を標的にしていなかったということだ。

***病院は爆弾ではなくその爆風と衝撃波を受けた。ガラスが割れ何人かの人が傷を負った。**しかし一人も殺していない。イスラエルよりのメディアは、イランが病院も無差別爆撃したと報道したが、しかしイランはイスラエル軍と違う、彼らは病院を狙い撃ちにしない。それは我々がガザで見た光景とはぜんぜん違う。そこではイスラエル軍が病院を直接、わざと狙って砲撃した。一つではなくいくつもの病院をそうやって襲撃した。

もう一つあらためて実感したことがある。イランはイスラエルの 91 倍の面積がある。だからイランがイスラエルの国際空港を一つ潰してしまうと、彼らは空路で国外に出る手段がなくなってしまう。軍の飛行場に行くしかない。

一方、イランには 29 だったかな、国際空港がある。今回イスラエルは、そのうちの 2 つを閉鎖することができた。だからイランにはまだ 27 も残っている。ヒット数でなく打率を問題にすると、イスラエルはこれらのミサイル攻撃に対してはるかに脆弱であったということだ。

イランの攻撃に関してはもう一つの要素がある。それはイスラエルの防空能力の問題だ。彼らの高価な防空システムが必ずしも役に立っていないことが示された。

イランのミサイルは安い。初期シリーズは1本250万円のものだ。そして300万円、350万円と高くなっていく。通常使用されるときは、少なくとも2発は発射されるが、時には10発も発射される。

ここで突然、経済的な問題になる。**アメリカのミサイルはとてつもなく高価だ。**イランの攻撃用弾道ミサイルや巡航ミサイルや無人偵察機は、最も高価なもので百万ドル（一億5000万円）だと思う。

アメリカのミサイルTHAAD（戦域高高度防空システム）は1290万ドル。つまり、ミサイル1発につき1300万ドルということになる。

金額だけの問題ではない。そもそもミサイルは無制限に生産され、無制限に供給されるわけではない。実際、イスラエルのエアローミサイルの生産は年間50発と報告されている。

もしイランが50発の弾道ミサイルを発射すれば、イスラエルはその50発をすべて使い切ることになる。それは補充されなければならない。速やかにだ。そうでなければイスラエルは防空ミサイルなしの夜をすごすことになる。これが軍事力学だ。

そしてこの消耗戦の戦争力学こそが、この戦争の根底にあるものだ。なかなか多くの人に理解してもらえないとは思わないが…

この戦争の行く末だが、これから将来、戦闘を続け、コストを吸収する双方の能力を見るべきだ。停戦が実施されたが、これが続くとは誰も思っていない。両陣営が再軍備を行い、再開の可能性に備えるだろうというのが大方の見方だ。

イスラエルもイランも、受けた損害から回復するだけでなく、もちろん兵器の補充もしなければならない。イランは、私が間違っていなければ、まだ非常に大量のミサイルの兵器庫を持っているように見える。彼らはまだイスラエルに対して追加使用することができる。

しかし、イスラエルがこの多くから回復するために、必要な時間はどれくらいだろうか？ つまり、使用されたミサイルを補充する時間ということだ。それは必要量を生産能力で割った数だ。生産能力は工場の生産効率と原材料・燃料などの供給量との掛け算だ。あなたも、この限られた生産能力について気にしているようだ。

まず港が機能する必要がある。彼らは宣伝をしていることだろう。「ヘイ、イスラエルに来ないかい。ここはこの上なく安全だ。ビジネスのためのスペースはしっかりオープンしている」

そういっても、みなそんなことは信じない。現地には厳重な情報統制が敷かれていて、それはミサイルによる被害が甚大だからだと感じているからだ。ということは、イスラエルは防空システムの補充で大きな課題に直面しているということだ。

理由は単純だ。アイアンドームやパトリオットミサイル、THAAD といった防空資材がすべてが非常に高価で、非常に限られた供給量だからだ。それらの多くは過去 3 年間にウクライナで使い尽くされた。

生産レベルだが、例えばパトリオットミサイルを例にとると、ロッキード・マーティンは年間 550 発を生産している。

防空基地のロケット発射台には縦横 4 列ずつの発射孔があり、16 基のミサイルが搭載されている。ミサイルが 1 発飛んでくるとに 3 発ずつ発射される。その供給量は急速に減っていく。ロッキード社に「おい、フル稼働だ。エンジ

ンをかけろ。プロペラを回し始めるぞ」と言うことはできない。そういうわけにはいかないんだ。

第五世代戦闘機の代表である F-35 の製造には 18 カ月から 24 カ月かかる。第二次世界大戦中の 1943 年にはどうだったか、アメリカはこの年、B24 リベレーター爆撃機の製造を開始した。彼らはそれを 63 分で組み立てることができた。組み立てが終わった後、18 時間で飛行機を飛ばす準備ができた。

それが今では 18 ヶ月から 24 ヶ月かかるようになった。そうってしまったのだ。

西側諸国の技術の高度化は、大量生産が困難なほどになっている。したがって高い。ロシアはそうではない。私の理解では、イランも同じような状況にある。こんな壊れやすい高級ネズミ捕り器を作っているわけではない。その代わりに、彼らは実際、かなり素早く大量にネズミ捕りを仕掛けることができる。**つまり、防空システムの復旧時間という点では、イランはイスラエルよりも有利な立場にある。**

ウクライナでも明らかになったことだが、過去数十年間、西側諸国が戦ってきた戦争は小規模で強度が低く、技術的な優位性に焦点を当てたものであった。

イランの防衛戦略は、まあ単純化しすぎかも知れないが、ソーセージ工場のようだ。ミサイルとドローンを送り出すことに専念しており、これが彼らの戦闘力構想の心臓部になっている。

この物量作戦に対抗するには、イスラエルへの供給能力を確保することが鍵になる。それは明らかに我々のもう一つの戦争である。これがウクライナにおけるロシアとの代理戦争にも影響することを考えると、世界全体にどのように影響するのだろうか、そのことも考えなければならない。

その観点からすると、防空ミサイルを再装備することは、イスラエルにとって非常に大きな挑戦だ。それはアメリカからより多くの爆弾を手に入れること

だ。通常の爆弾をたくさん持っているつもりはない。その手の武器に不足はない。

武器に割り当てられる資金については、目下のところ、ウクライナは後回しにされている。彼らは今、「赤毛の継子」と呼ばれて、一段低く見られている。

ヨーロッパもイスラエルに武器を送っているようだ。繰り返すが、あなたが言ったように、ヨーロッパにとってはウクライナの防衛が主な任務だと思う。しかし、特に最近のヨーロッパ諸国にとっては、資金に制限がある。そして、アメリカ人もまた、いくつかの問題を抱えている。最近、アメリカがウクライナへの武器援助を再開したという報道が流れた。パトリオットミサイルも供与されたようだ。それはイスラエルに行くべきではなかったのか。

トランプについては、彼が何を言うかではなく、何をするかについて評価すべきだ

トランプが怒った理由について考えてみましょう。イランがこの戦争で勝利を主張したとき、彼は怒ったようで、「それはばかげた考えで、現実ではない」と主張した。

しかし彼はイスラエルの攻撃が始まってからしばらくの間はこう言っていた。「イスラエルは、この問題で激しく叩かれている」と。それがハメネイの強がりの言葉をきっかけにして態度を一変させ、イスラエル支持・イラン攻撃にまわり、最後は米国自身による原子力施設爆撃で幕を閉じた。イランの駆け込み爆撃は黙認した。

そして両国に停戦を提案し、両国はそれぞれの理由から停戦を受け入れた。そしてともに「勝利した」と叫んでいる。

まあ、彼はよくしゃべるし、優れたセールスマンだ。そして「強引な手段ではあるが、自分がイランを救った」と思っているフシがある。トランプはいろいろなことを言っていて、その多くは 20 分前に言ったことと矛盾している。

しかしここで物語の必要性について疑問が投げかけられる。いったいトランプが避けたいのは、イスラエルが弱体化しているように見えることなのだろうか。というのも、強力なイスラエル軍のイメージは、善悪は別として、この地域における非常に重要な抑止力だったからだ。

イスラエルによるイラン政府転覆作戦

彼が聞かされたのは首のすげ替え作戦だった。**イスラエルが6月13日に開始した政権交代作戦だ**。それは何年も前から計画されていた。トランプが思っていた最近の計画ではなかった。彼はそれについて説明を受け、そしてイスラエルに保証を与えた。

イスラエルはいう。「**我々はそこに入るつもりだ。そのトップレベルを連れ出すつもりだ。そして、この人間たちを皆殺しにする。それから数時間だ。その後、私たちは実際に、新政府の樹立を手助けできる立場にいるはずだ**」

OK、これが売り込み文句だった。

あとはイランの遠心分離機にバンカーバスターを打ち込むだけだ。そうすれば、イランの核開発プログラムは崩壊する。そう。たしかに彼らは破壊装置を発射し、数台の遠心分離機を破壊した。

イランは4週間か6週間で稼働を再開した。非常に短期間だ。これが今回の出来事だ。激しい打撃を受けたが、床に横たわった胎児のように丸まることはなかった。床から起き上がった。そしてイランは立ち直った。

トランプは当初、最初の12時間以内に「私はブリーフィングを受けていた。私はすべてを知っていた」と述べた。日付も時間も知っていた。つまり、イランはトランプに彼の「軍事的勝利」を認めるよう約束させられたことになる。

イランの「勝利」にロシアが貢献

（評論家の）ペペ・エスコバルはロシアの援助があったと言っていた。彼らはネットを手に入れ、サイバー攻撃を撃退した。防空システムを稼働させ、コンピュータネットワークを稼働させ、**12 時間以内にミサイル攻撃を開始した。**

そして戦争が 2 週目に入り、8 日目、9 日目と進むにつれて、イスラエルが大変なことになっていることに気づいた。

ワシントン・ポスト紙もそうだが、『ウォールストリート・ジャーナル』紙ほどイスラエルを応援している新聞はないだろう。

防空ミサイルの在庫はあと 2 週間分しかなく、それで終了だ。これは明らかに交渉の要素があった。イランが辞めなかったのは、アメリカが空爆したからだ。

イランも同様に、「おい、アロウド Alouded を叩くぞ。全員そこから追い出せ」と繰り返すが、これは象徴的な攻撃だった。実際にダメージを与えて、こんなことをしたことを後悔させてやろうというものではなかった。ただファイティングポーズをとっただけだった。

この時点では、**原子力施設への爆撃は、イスラエルを救うためのものだった。**トランプはこのようなシナリオを作り上げ、フーシ派と同じようなセリフを吐いた。

フーシ派が「降伏」したときのことを覚えているかい、グレン？フーシ派が降伏したっていうんだ。もう我慢できない。やめろ、アンクル・サム！トランプは降伏したとは言わなかったが、軍を撤退させた。客観的な事実から見てそれが敗戦というものだ。

（補注：）「イエメン・米国が停戦合意 イスラエルとの戦闘は継続」をご参照ください。

http://blog.livedoor.jp/aala_news/archives/32029338.html

【翻訳 鈴木頌】